居心地を創造し 経過が住み方を生み出していく

いきるいえ

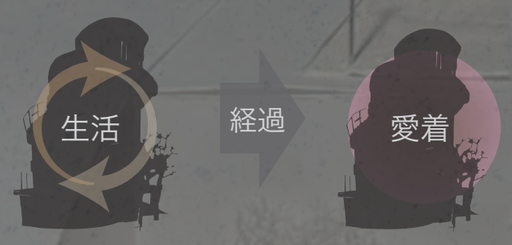
所在地：東京都渋谷区代々木 4-12-1
敷地面積 :130.35 ㎡
建築面積：61.95 ㎡
延床面積：135.34 ㎡
構造種別：木造一部鉄骨造
建築高さ：11,500mm

この家について

時間と共に住む人がこの家に愛着を抱き
呼吸をするように育っていく
家は人を際立て 人は家に家以上の意味を与える
そんな関係性が生み出されて欲しい
住空間を築く人間は設計者ではなく
そこに住む人である故に 住む人が自ら
「居心地が良い」空間をこの家で模索するように
家と時間を共にして欲しい
設計者がクライアントにできることは依頼に応じる他に
この家でどんなストーリーが生まれるのだろうかと
居住者自身の想像力を掻き立てることのできるような
夢を提供することではないだろうか

居心地とは何か

人はどんな時に居心地が良いと感じるだろうか。
快適すぎる生活を提供することが居心地が良いと感じる生活とつながることではない。
あくまでも居心地は、住む人がそこで過ごしたかけがえのない
思い出によって徐々に生み出されていく。
それをここでは「意図せぬ増築」とし、「終わらない家」を住む人と共に目指していきたい。
だからこの家に具体的な意味は与えない。あらゆる解釈が可能な無意味な家をここに置く。



意図せぬ増築

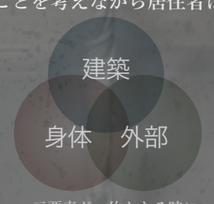
無意味ほど意味のあるものはない
無意味＝あらゆる解釈が可能だからである。
設計者ではなく住む人がこの家に意味を直接つけ
経過と共に家を作り上げていく。
設計者の意図していない
この家のあり方を確立していって欲しい。

終わらない家

もしこの家がこの敷地から消えても、
人々の記憶に鮮明に残るような家であって欲しい。
記憶という形のないもので
この家を継承することはできないか。
形が残っていなくても、
この家が人の記憶に強く存在するという
限りない家になることを願う。

身体とランドスケープの一体化

この家は一部地面に埋まっていて、モルタルで仕上げられている。
その仕上げはそのまま内部空間にまで浸出しており
目地がないため内部にいても外にいるかのような感覚になる。
また階段は全て外付けになっており雨風に身体が直接晒される。
家の本質が自然から身を守ることだとしたら雨風から身を守ることのできないこの階段は
家の一部ではなくなってしまうのだろうか。
-家とは何か - 家はどこまでが家なのだろうか。
そんなことを考えながら居住者はこの家と共に生きる。

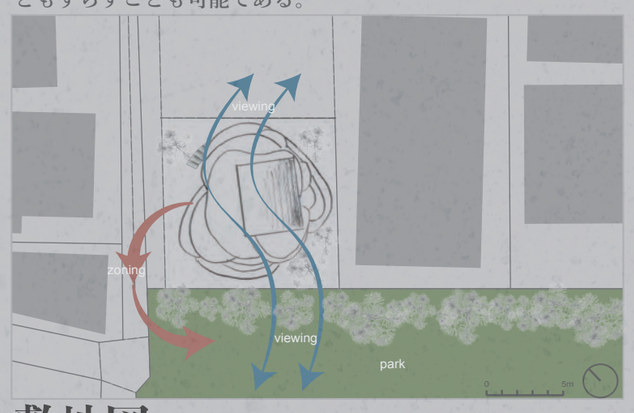


三要素が一体となる時に
はじめてこの家が成立する

外付けの階段が
家の定義を曖昧にする

周辺環境

この建築を 1100mm 下がった公園側から眺めた時、奥まで透き通って見えるようになっている。
また、GL レベルを下げている為、公園からの目と合わせることもずらすことも可能である。



建築概要

都内に建つ、デザイナー夫婦のための仕事場兼住宅。
高さ 11.5m の室内空間に異なるレベルのスラブが存在し、それぞれが生活に意味を成す。
都内に建つ住宅とは言えど高層ビルが立ち並ぶ都心から少し離れたところにこの建築は身を置くこととなる。
周辺の住宅はそれぞれ個性をもつ情報が密に並んでいる。
この敷地の情報に新たな情報を付け加えねばならない場合、なるべく透明度があって、且つ、人々に影響を与えられる象徴的な家は置けないだろうか、という考えのもとこのような家をこの敷地に表した。

周辺との関係

この家は家以上に家であって欲しいと考えている。いったいどんな生活が行われているのだろうかと、住む人だけではなく周辺の人々の想像力を掻き立てられるような存在であって欲しい。
そのため、外装は家と家の隙間、1m 下がった公園からのビュー、坂の下からの見え方を考え 360°どこから見ても美しく見えるような外観にし、波板など、素材感でアノニマスな雰囲気を演出し、配管や室外機などの設備的な存在もデザインの１部として取り入れられるように意匠を考えた。

敷地図

敷地前方の公園からの眺め

多くの坂が存在する

参宮橋駅

均質に立ち並ぶ住宅

設計プロセス

家に動きを
不動産である建築にどう動きをつけるか、形が止まっていてもどこか動いているようにみえるリズムをスラブを積層させたり
階段の配置により人間の動きを取り入れ「止まっているのに生きているかのような家」を目指した。

スラブを積層させる
外部にははみ出し、内部には進出したスラブは、各フロアに存在していて、全て滑らかな曲線形で空間を突き破るように自由に配置され、
250mmのレベル差が部屋の境目をぼかすようにして、場所を定義づけることなく生活の自由度を上げている。

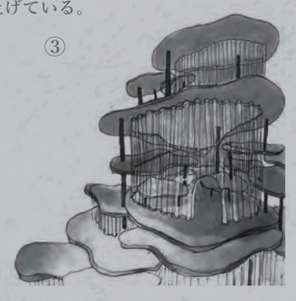
①

表層化された地面が空間の断片を構成する

②

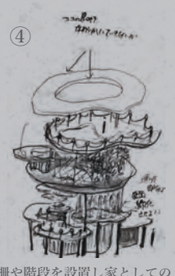
積層されたスラブを支えるように柱を設置する

③



室内空間を軽やかに認識させる膜を貼る

④



柵や階段を設置し家としての
リアリティをあげる

⑤

広がったスラブとは対比的に
シェルターとなる空間を配置する

⑥

ボリュームの配置と
テクスチャを考える。

⑦

必要最低限の用途とプランを
立体的に考える。

コンテクスト

この積層された曲線スラブは、クロード・モネの「睡蓮」をレファレンスとして睡蓮の葉を平面で見た時に
この一つ一つの縦に重なって見える葉が生活空間になり得るのではないかと考え断面的に形状を考えた結果このような形が生まれた。

「睡蓮」を絵画として平面的に観る。
すると本来水に浮かんでいる１
枚１枚の葉が縦に立体的に積層

その重なった睡蓮の葉を１つの
スラブにみたてて考えた時、重
なりによる微妙なレベルの差で
空間を閉鎖的ではなく広々と構
成できるのではないか。

葉を宙に浮かせ断面的に形を構
成し、身体スケールを意識し敷
地に当てはめる。

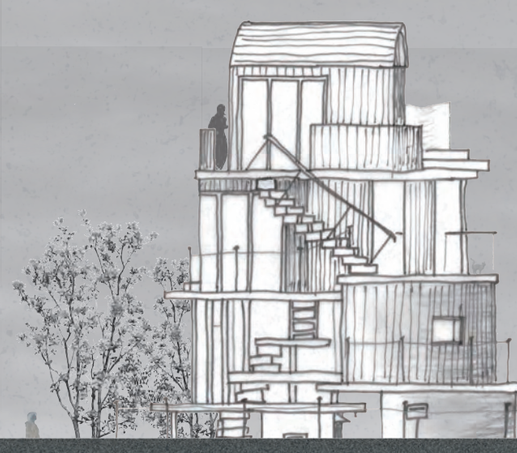
この微妙なレベルの差が人の目
線をずらし、壁がなくても「個」
の空間を曖昧に形成し可変性の
ある自由な空間を作り出す。

壁を建てるにしても自由に積層
されたスラブはそのまま残して
組み立てていくことで、必然と
ボリュームもずれながら建物を
大きく形作られている。

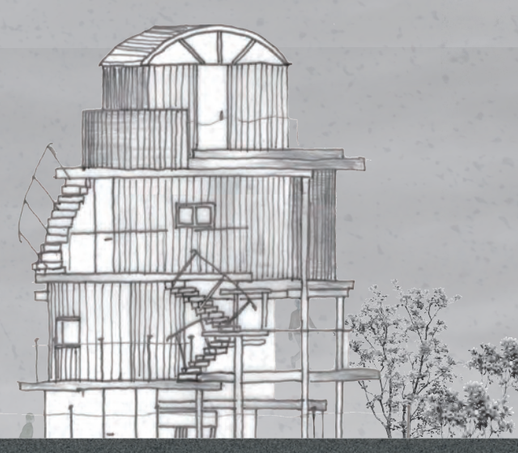
1/150 立面図

南東

北東



北西

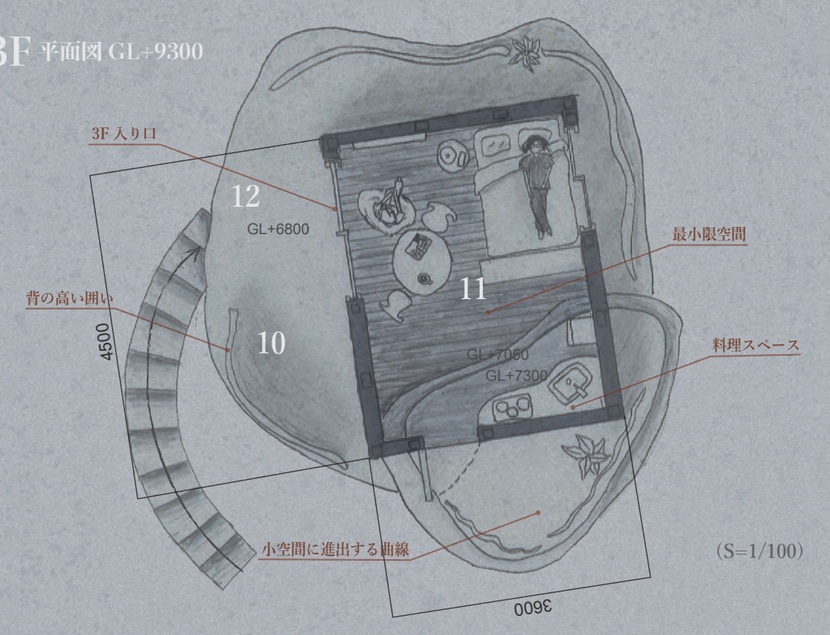


南西

0 1 5 10(m)

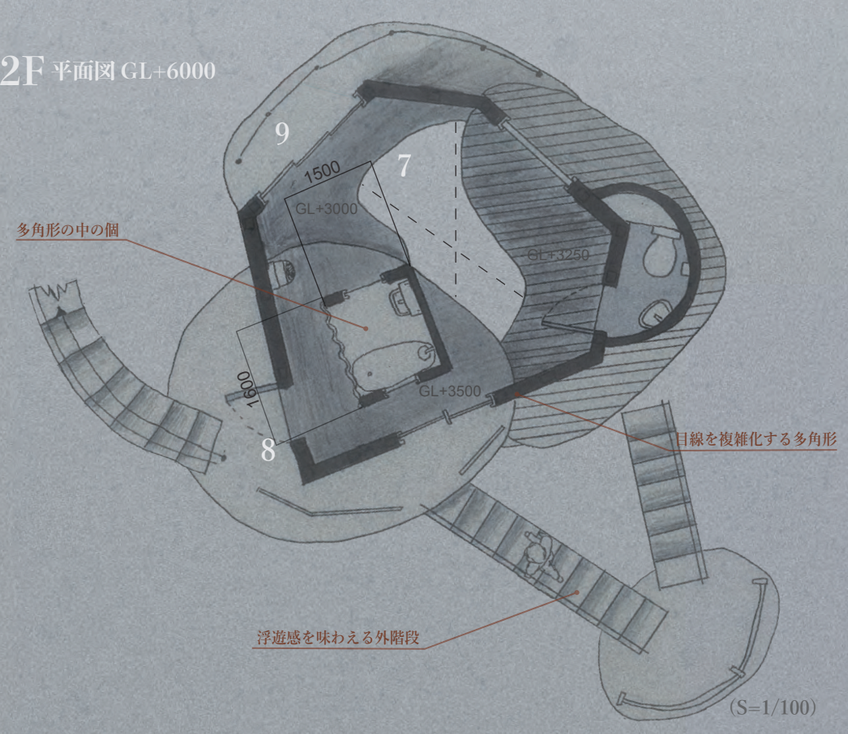
平面計画

3F 平面図 GL+9300



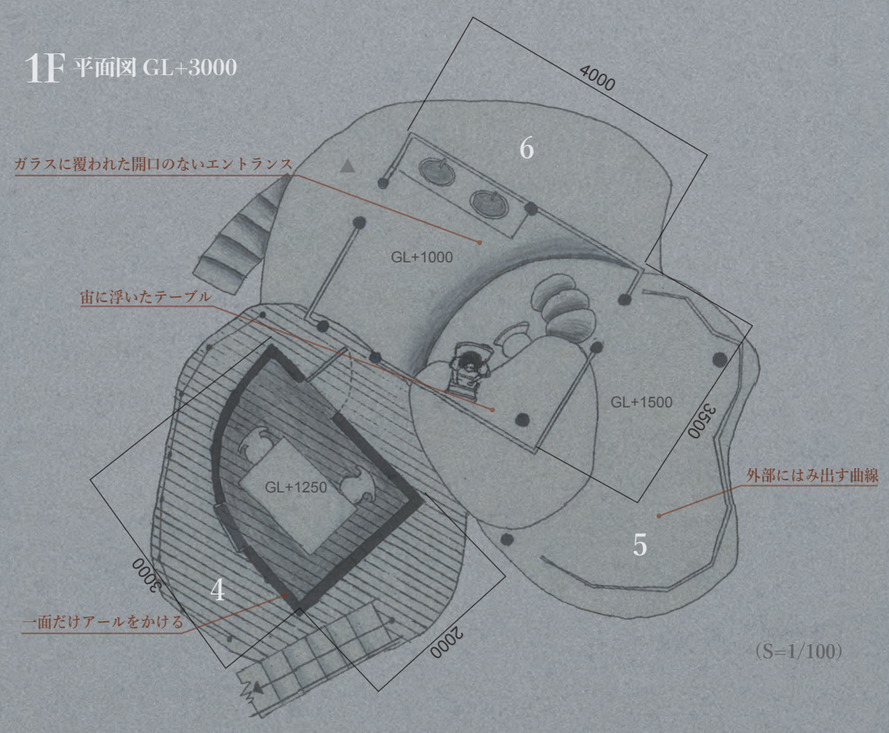
(S=1/100)

2F 平面図 GL+6000



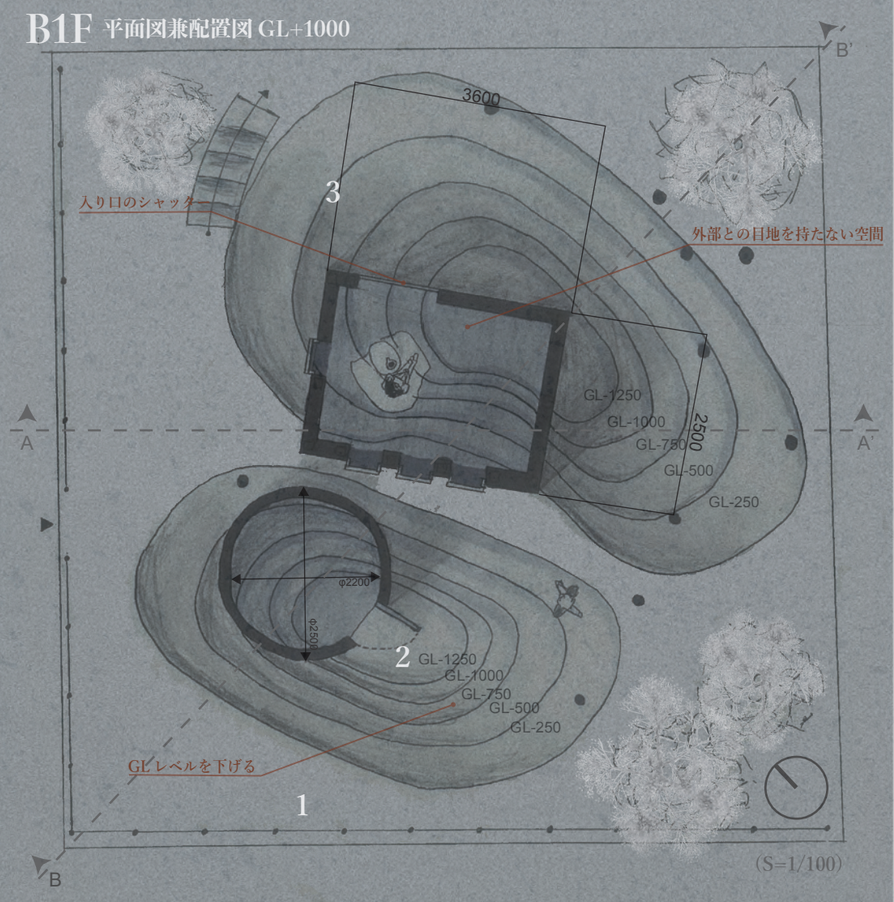
(S=1/100)

1F 平面図 GL+3000



(S=1/100)

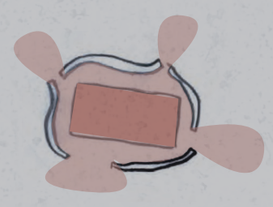
B1F 平面図兼配置図 GL+1000



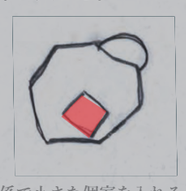
(S=1/100)

構成ダイアグラム

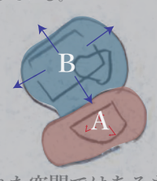
下の階を土台だとすると小屋のように見える最上階。ヴォールト屋根はこの家全体を覆う屋根ではなくこの小屋のみを覆っている。側面にはガラスをはめ込みトップライトとしての役割を担う。



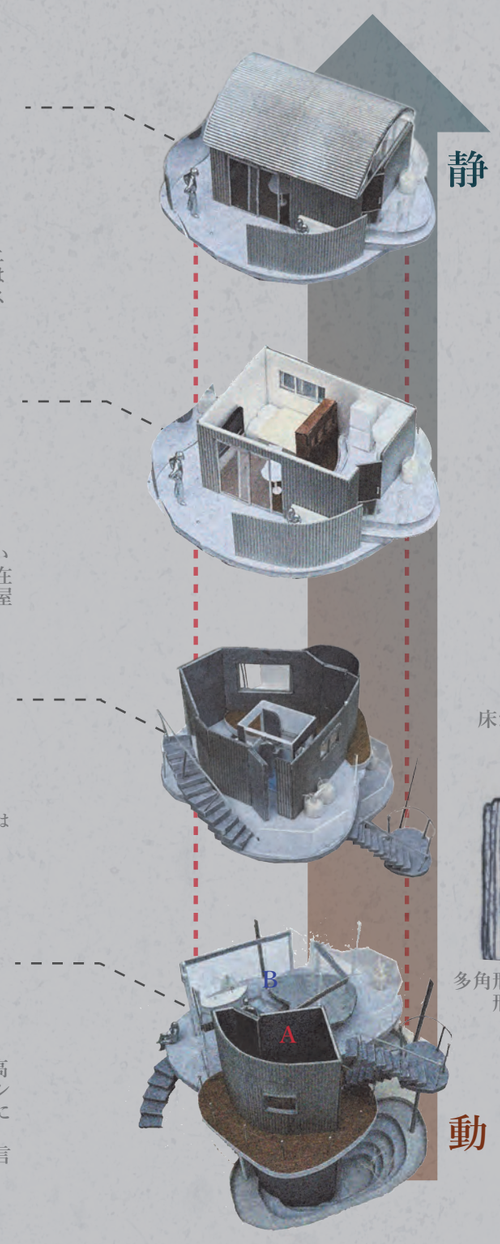
最上階はこの家で最もプライバシーが守られている空間である。部屋の外にはまた一幕の壁が存在し外部と内部の境界を曖昧にしている。この小屋はベランダから中に入れる。



家の中に入れ子の関係で小さな個室を入れるという考え方はルネ・マグリット
「Photographie documentaire　liée à René Magritte」
という作品を参考にしている。

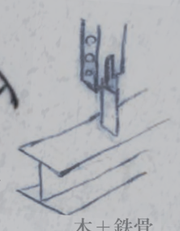


A は狭く閉ざされた空間ではあるものの天井が高く、たった1つある正方形の出窓は外付けサッシで内部空間から外を眺めるとコラージュのように抽象的に見える。
一方で B の空間は開口が一切ないため外部とも言え対比的に配置した。



建築を構成する１つ１つのエレメントを
単体でデザインしていく
そのエレメントをコラージュのように
貼り合わせて１つの建築とすると
スケール感が僅かずつ歪んで見えていく
家はシュールな存在を放つ

手すりは自然な動きを意識し
垂直方向に伸ばさない

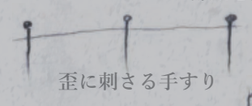


木＋鉄骨

床から天井まで伸びる
抽象的な開口

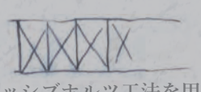
奥行きのある窓は
この家のシンボル

部屋を囲う壁の内側を鏡面に



歪に刺さる手すり

多角形に円柱を切り欠いた
形を噛み合わせる



マッシブホルツ工法を用い
薄く伸びやかなスラブを

GL のレベル下げ
アイレベルをずらす

GL から最上階まで伸びる柱

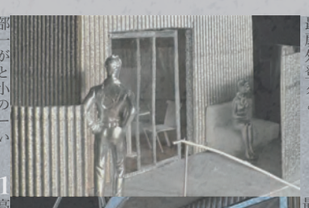
最上階はこの家の中で、最もプライバシーが保たれる場所である。
最小限ではあるが、キッチンが設置してありこの１室だけでほとんどの生活行為ができるようになっている。

最上階のペントハウスを囲う鏡面の背の高い壁は、外側からはとても覆われて見えるが、内側からは外部に開いて見える。

10

ペントハウス内部はこの家の中で一番プライバシーが保ちやすい空間となっていて、最小限ではあるものの、料理するペースも設けられている。

11



最上階の入り口は扉からではなく、外付けの階段を登った先のベランダから入り込むことができる。

12

2 階は、多角形の壁の中に四角いコアが 1 つ存在し、
入れ子の関係になっている。
コア部分は浴室となっているのだが、この入れ子の関係を取り入れることで、室内を複雑化し人の目線をずらすように誘導している。

下層部が受け入れた外の光が二階の空間を全体的に柔らかく明るくする。

7

天井まで伸びる高さ 3m の重々しい扉とスケルトンの軽快な浴室を近くに設置し空間を歪に見せる。

8

最上階のペントハウスへ向かうときに必ずここを通り上へ上がる。
このとき庭に植っている木々を見下ろしながら階段を登ることができる。

9

この家の入り口は開口のない外と繋がったガラス空間。ここは内部とも外部とも捉えることができる。ここに１枚ステンレスの曲線の板をスラブから 700mm 浮かせて設置し、これがテーブルにもなり得たり、上の階が吹き抜けなのでハシゴをかければ上へ上がれる手段にもなり得るようになっている。

曲面の壁に差し込むように設置したこの窓は外付けサッシとなっており、内側から見るとコラージュのように外が抽象的に見える。

4

表層化された地面が空間の断片を構成していくのに従って、手すりやテーブルも断面でみた時の横の水平ラインを意識し、宙に浮かせるように構成した。

5

ガラスで覆われ開口が一切ないエントランスは内外の境界を曖昧にし、空間の捉え方は居住者に委ねる。

6

GL のレベルを１段 250mm ずつ下げ、道路側の通行人とは目線がずらせる。この 250mm の段差は外と連続して内部空間にも進出している。モルタル仕上げの外壁は住宅の基礎がそのまま剥き出しになっているようにみせている。

公園側観ると公園は、敷地より 1,100mm 下がった位置にあるため、ちょうど GL レベルを下げた位置に居住者が目じあ位置にいるが同じ位置の位置が同じ立線になることがある。

1

B1F の小空間はコンクリートでできており、GL 下の外基礎がそのまま外部に突き出している。また、ここには目地がないため外部の情報がそのまま内部へと侵入している。

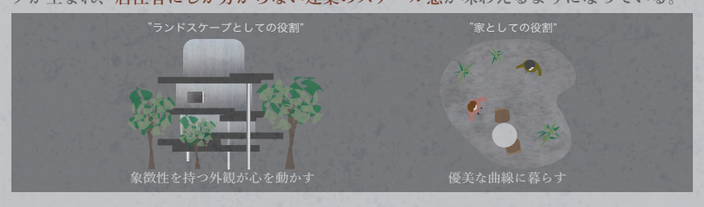
2

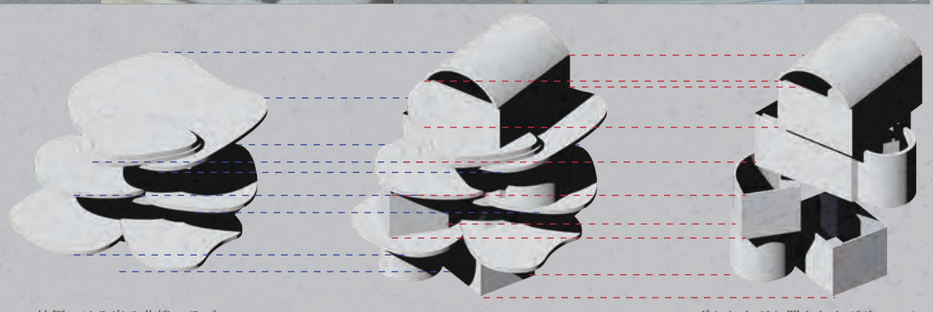
細い柱が無数に点在し、それらがスラブを浮かせ、公園側から見たときに奥まで透き通って見えるように。この剥き出しの柱は、レベルの下がった空間を囲うようにも配置されている。

3

直線と曲線

積層されたスラブは断面では水平にまっすぐ伸びて見えるが平面で見ると曲線が現れる。こうすることによって、この家が周辺に与える印象と実際に住む人が感じる影響にギャップが生まれ、**居住者にしか分からない建築のスケール感**が味わえるようになっている。

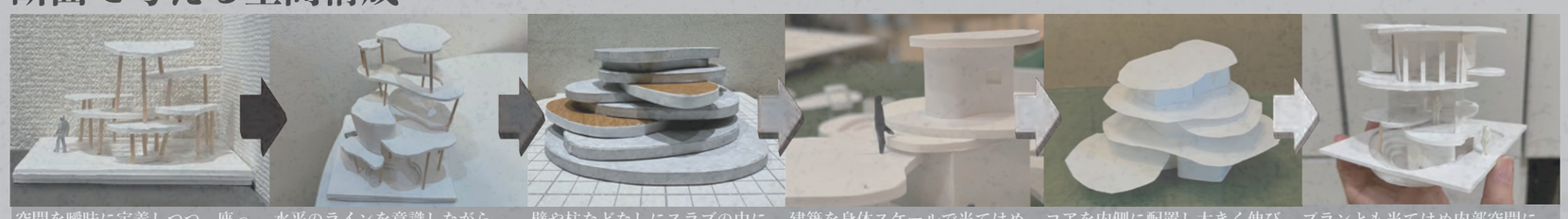




外側にはみ出る曲線スラブ

ずらしながら置かれたボリューム

断面で考える空間構成



空間を曖昧に定義しつつ、座ったり登るなどの機能を果たすことがスラブを重ねていけばできる。

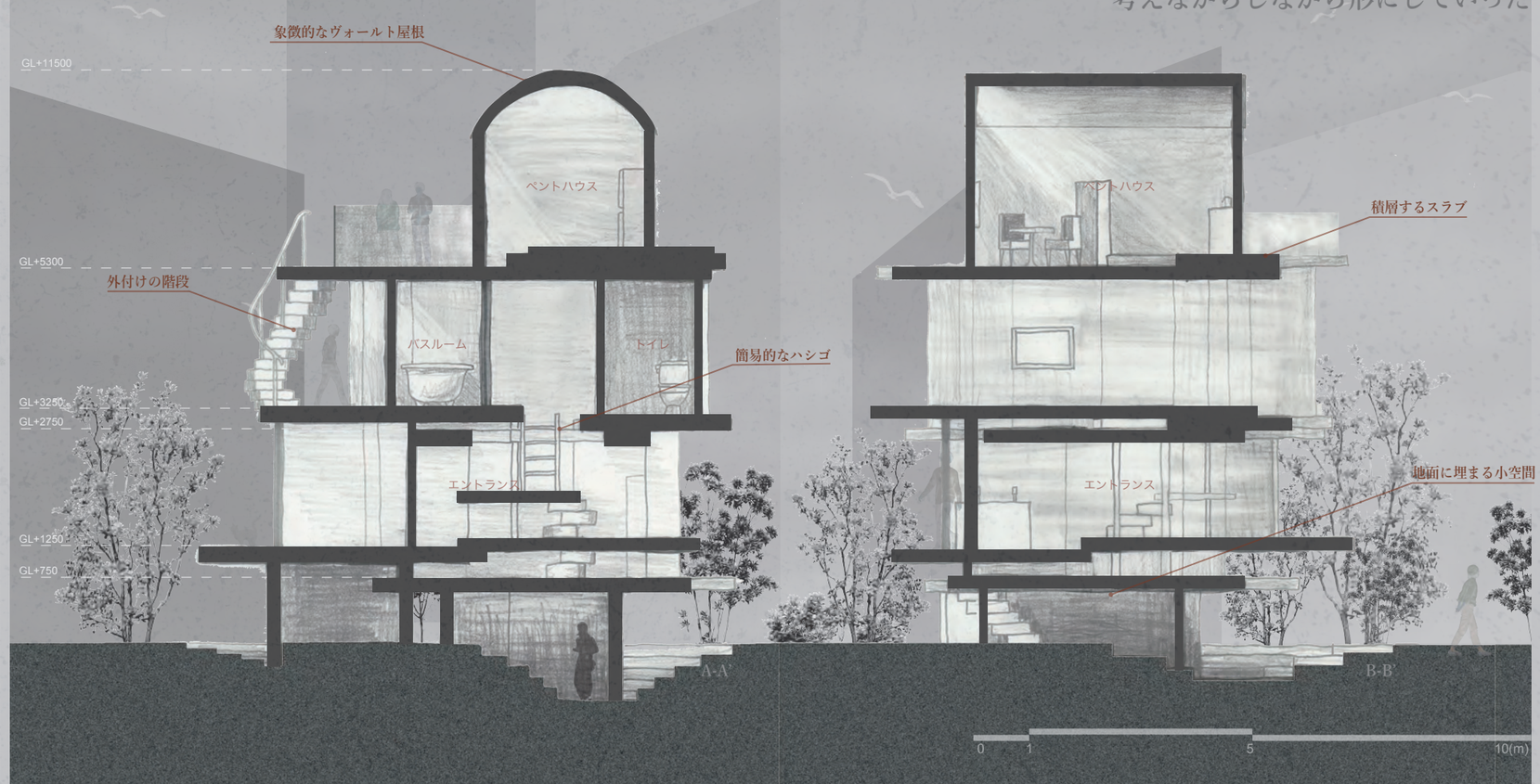
水平のラインを意識しながら徐々に家らしくすることを考えていく。

壁や柱などなしにスラブの中に空間をつくることはできないのか。

建築を身体スケールで当てはめ考えた結果壁や柱という要素が必要なのが分かった。

コアを内側に配置し大きく伸びたスラブを極端に重ね、葉が重なっているように見せたい。

プランとも当てはめ内部空間にもスラブを侵入させ、それぞれが空間を滑らかに定義していく。

1/100 断面図

水平ラインを縦に積層させることで
どう機能と身体スケールに当てはまっていくのかを
考えながらしながら形にしていった